（4）2000年（平成12年）6月2日（金曜日）　対馬新聞　第3239号

国際ハイウエイプロジェクト

日韓トンネルの歴史（二）

西堀栄三郎の感動

西堀栄三郎をご存じだろうか。第一次南極越冬隊隊長を見事に勤めたことで有名なエンジニアであり発明家、また登山家であった西堀氏は日韓トンネル計画でも大きな役割を果たした。西堀氏なくしては日韓トンネル計画は動き出さなかったかもしれない。

昭和五十六年、韓国のソウルで開かれた国際会議で国際ハイウェイ・日韓トンネル計画が提唱されたことは前回触れたが、その会議に出席した西堀氏は提唱の内容に感銘を受けその実現にむけて動き出した。帰国後、西堀氏は登山仲間で親密であった佐々保雄氏に日韓トンネルの研究開始を勧めた。佐々氏は長年青函トンネルの地質顧問として活躍しながら研究者・教育者として多くの優秀な地質学者を輩出していた。佐々氏は勧めを受け止め自ら青函トンネルの経験者を結集して日韓トンネル研究会を設立し、日韓トンネルの技術的調査研究を開始した。

巨大な規模のプロジェクトは決して一人の人間の力では成しえるものではない。しかし、一人の人間の強い確信と努力がないとプロジェクトが動き出すことはないのも事実だ。西堀氏は日韓トンネル研究会の顧問として活躍しこの対馬にも地質調査の視察などのため来島しすみずみまで足跡を残している。

戦前、鉄道省の技術者らが来島し地質調査して以来、三十年余の星霜を経て、日韓トンネルの調査は新たに始まった。世界に蔓延している貧困と様々な格差を解決するという崇高な理念をかかげながらも、実際に行う調査研究はまことに地味だ。対馬がその地理的条件から日韓トンネルの礎になるのは間違いない。その未来像は如何に。それは誰が描くというものではなく現実に対馬に住むわれわれが構想し育むものではないだろうか。